

アクティブ・エイジング世代の登場とその社会的意味

: ベビーブーム世代の社会的関係を中心に

李名鎮・孫珠僖・朴秀璘（高麗大学社会学科）

I. はじめに

今後10年以内に韓国社会は、老年世代が主力世代となるような急速な高齢化社会が迫っている。2015年、65歳以上の人口の割合は13.1%であり、2030年には24.3%、2040年に32.3%、2060年には40.1%に持続的に増加すると展望されている。このような高齢化とともに進行する少子化傾向は、全人口の構成比に急激な変化をもたらしている。幼少人口100人に対する65歳以上の人口は、1990年には20.0人から2015年には94.1人で4.7倍にも増加し、25年後の2040年には現在の3倍以上増加した288.6人になり、人口の高齢化は急速に進むものとみこまれている。また、生産可能人口100人に対する65歳以上の人口は、2015年に17.9人から2060年に80.6人になり、4倍以上増加すると予測されている（統計庁、2015）。

高齢化の速度も速い。国連が規定した老齢人口比率の基準にみると、韓国社会は老年人口の割合がすでに7%を超え、高齢化社会に突入した。それだけでなく、2018年には14.5%を記録し、高齢社会に突入するだろう。2026年には20.9%に達し、超高齢社会への突入が目前に迫っていることが予想される。これは、韓国社会が高齢化社会に突入してから18年と8年ぶりにそれぞれ高齢社会、超高齢化社会にまで至るということを意味している。このような予測は、日本の24年と12年、フランスの115年と41年、米国の71年と15年に比べてはるかに速いものである。

このような高齢化の傾向は、医療費と福祉費用の増加につながっている。健康保険審査評価院によると、保険人口の12%である高齢者の診療費は、21兆ウォンを超え36.8%に達している。平均治療費が他の年齢層の3倍だ。そのなかで認知症と呼ばれるアルツハイマー病に起因する入院

治療費用は、9600億ウォンを超えた。これは社会全体の構造的にも、個人的にもさまざまな負担を与えている。福祉制度の維持に伴う財政問題の深刻化、公的医療施設と医療従事者の慢性的な不足という問題が台頭している。このことはOECD加盟国のうち、高齢者貧困率と自殺率1位という事実にも繋がっている。したがって、どのような形態であれマクロ的な側面では、既存の医療政策と福祉政策の修正が必要であり、ミクロ的な側面では老年期の絶望と怒りのような心理的な負担を減らすための努力が急がれている。これに対する一つの方策として「健康な老年」への関心が高まっている。

ところが「健康」な老年に対する今後の政策的、技術的対応のためには、老年世代への深い理解が必要であろう。今後、高齢人口に加わる世代は、既存の老年世代とは、量的にも質的に異なるからである。実際、近代以降に韓国社会が経験した急激な歴史的変動は、各世代が直面した社会的環境だけでなく、価値観や行為に大きな差異を生んだ。各世代のユニークな特性は、さまざまなタイプの世代論をつくり出した。投票行動のような政治参加や社会的価値、行為だけでなく、レジャーや消費ような行為も世代を基準にして説明する機会が多くなった（イ・ミョンジン2003;チェ・セッキョル、イ・ミョンジン 2011）。現在、高齢人口に加わる世代はベビーブーム世代である。ベビーブーム世代は戦争直後の不安から脱することで、出生率が急増した世代を意味する。米国では、ベビーブーム世代（baby boomers）を第2次大戦直後の1945年から1965年に生まれた世代とみなし、その数は7,800万人程度に達することが知られている。日本でも第二次大戦直後の47年から49年までに生まれた団塊の世代の806万人が、ベビーブーム世代に属する。韓国の場合、朝鮮戦争（6.25戦争：1950-1953）後の1955年生から産児制限が開始される直前の64年までに生まれた人たちを、ベビーブーム世代とみる意見が多数である。その数は、約900万人に達すると言われ、この世代がまもなく韓国社会で、最も高い割合を占める集団になると予測されている。

ベビーブーム世代が登場したことにより、さまざまな社会的変化があらわれた。何よりもかれ

らの数が、以前の世代に比べてはるかに多いため、多様な制度や文化的な変化をもたらした。かれらの教育制度、文化/芸術、学生運動、公民権運動などのさまざまな分野で、独特な社会現象を生み出した。韓国も同様である。ベビーブーム世代は、かれらだけのライフサイクルを経験して独自の文化を構築している。例えば、教育部門では、高校平準化のような教育制度全般を変化させた。これによって、社会全般に入試地獄と課外授業の問題を引き起こした。政治的に敏感な時期を経験しながら、積極的な抵抗勢力として登場し、最近の大統領選挙などの主要な選挙を決定する集団として登場している。経済的には、他の世代に比べ安定的であり、韓国経済の成長とともに雇用や起業などの多様な経済的機会を見つけることができた世代であった。

最近、このようなベビーブーム世代の引退にともない、さまざまな社会的問題が台頭している。雇用や福祉または健康保険や年金問題などのマクロな問題だけでなく、家族関係や情緒的な問題のようなミクロな問題でも頻繁に言及されている。基本的には「健康」な老年を維持することは情緒的な個人の問題を解決する方法でもあるが、経済的なマクロな問題を解決するための方法でもある。もちろん、最近の健康は単純に病気でない状態だけを意味するものではない。健康は肉体や精神的な幸福だけでなく、社会科学の領域である社会的な幸福も含んでいる (WHO, 2016)。ベビーブーム世代が身体的、精神的、社会的な活動性を低下させず、健康な老年を送ることを意味するアクティブ・エイジング (active aging) を追求するような社会的対応が必要なのである。この世代は知識と経験だけでなく、経済的基盤も相対的に良好なので、アクティブ・エイジングの関連政策を実施するのに有利な側面が多い。しかし同時に、生活について多様で積極的な欲求を持っているため、より積極的できめ細かい社会的、政策的対応が必要である。

そこで、われわれが焦点をあてたい部分は、かれらの社会的関係に関するものである。われわれはこれに関連して、いくつかの質問をしたい。ベビーブーム世代の社会的関係の現状はどのようなのか？もちろん、他の世代と比較して、そのレベルを評価する必要がある。そして、このような社会的関係の現状は、これらの健康と社会、国家の政策的対応にどのような意味を持っているの

か。このような議論は、急激な人口構造と社会変化という状況を迎えている韓国社会の対応と、老年人口の健康的な生活に重要な意味を与えるものと期待している。

Ⅱ. 先行研究の検討

1. ベビーブーム世代

西欧ではコホート (Cohort) の観点から世代問題を扱ったマンハイム (Mannheim, Kan) に続いて、1960年代の学生の反体制運動を説明するための一つの取り組みとして、多様で深層的な世代研究が行われ始めた。しかし、西欧に比べ急激な社会的・歴史的変動を経験した韓国の社会科学界では、深層的な世代研究が行われていない状況だ。1990年代の韓国社会学会 (1990) の世代の研究とチョ・ヘソン (1990) の計量的研究を先頭に、世代の問題に関する実証研究が徐々に行われ始めた。しかし、このような議論はマンハイムの議論の意味において、または西欧の世代研究のようにコホートに基づく世代問題を分析するよりは、単純に、年齢別に世代を区別しているにすぎないという限界をもっている。くわえて、コホート区分もあいまいな場合が多い。以後、主に親と子の世代間の関係や差異、世代葛藤に注目した研究が行われたが、これらの研究もやはりコホートの視点に基づいた分析よりは、主に、各世代間の心理的な葛藤構造に焦点を当てているものがほとんどであり、世代に関連する理論的議論が不足しているといえる。

事実上、2000年代以降の韓国では世代議論が活発に行われてきたといえる。韓国精神文化研究院 (2000) が「386世代」の価値観をテーマにした公開討論会、そして韓国社会学会 (2002) が「なぜ再び世代なのか？」というテーマで開いたシンポジウムは、韓国の社会科学界における世代研究として注目に値する。これらの研究は、韓国の世代問題を政治的・社会的・文化的な文脈で、深層的かつ体系的に研究する試みであったという面で意義深い。以降、世代研究はより多様なトピックで、複数の学問領域で扱われてきた。主に韓国人の世代別価値観や態度、生活様式、政治性向などにあらわれた差異を確認するための研究が行われたが (チョ・ソンナム、ユン・オ

クキョン2000;キム・ギヨン、シン・スジン、チェ・ヘギョン2003;ファン・サンミン、ヤン・ジニョン、カン・ヨンジュ2003;ファン・サンミン、キム・ドファン2004;キム・ドゥシク2005;パク・キルソン、ハム・イニ、チョ・デヨプ2005;キム・ウソン、ホ・ウンジョン2007;パク・チェフン2010;チョン・サンジン2010;パク・クオニル2012;パク・チェフン、カン・ステク2012;キム・スジョン・チェ・スルギ、チェ・セッピョル2014)、とくに最近では、イングルハート (Ronald Inglehart) の仮説に基づいて、世代別脱物質主義の価値変化の推移を経験的に分析した研究がある(パク・チェフン、カン・ステク 2012)。また、国際比較を通して世代間の差異を分析した結果、韓国の場合は結婚、同居、離婚、夫婦の性役割のような家族の価値の側面で、世代毎に顕著な差異があらわれるとみるのは難しいが(ウン・ギス、イ・ユンソク 2005)、政治的イデオロギーにおいて中国、日本と比較した場合、とくに世代別に明確な違いがあらわれている(パク・ヒボン、イ・ヒチャン 2006)。そして伝統的価値、自由/平等主義の価値、物質/脱物質価値、法・制度の価値の変化にも世代間で差異がある(パク・ヒボン、イ・ヒチャン、チョン・ジョン、2008)。しかし、これらの研究も同様に、似通った出生時期を持つ人々が、歴史的経験を共有しているため、類似した価値や態度、行動様式を持つというコホートの視点の世代区分ではなく、単純な年齢区分や二分法的な新世代と、既成世代に区分する場合が多数である。

他方、特定の世代に注目した研究は、コホートの視点から世代を区分し、韓国の社会・文化的な変化や歴史的な文脈で理解しようとした。韓国の民主化過程と密接な関連がある386世代に関する議論(チョ・デヨプ 2002;コ・ギルソプ 2010)や、戦後のベビーブーム世代の研究(パチョン・スンドル、チョン・ヘサン、チョン・ジュヒ 2015)、コンピュータ、情報通信技術の発達と共に成長したN世代に関する議論(ファン・サンミン 2000;チョン・ソンホ 2003)などを通して、かれらだけが共有している経験をもとに、その世代に内在している固有な特性が行為、価値、意識、行動などにあらわれることを把握することができた。しかし、一部を除いたほとんどの研究が、特定世代に関する特性を歴史的な事件をふまえて、主に技術的に説明しており、実証

的に分析した研究は、ほとんどないのが実情である。

本研究では、韓国社会の幾つかの世代を比較してみるが、とくにベビーブーム世代に注目したい。韓国の世代議論で、ベビーブーム世代は戦後の多産時代に生まれ、数的に多数な集団をなし、かれらだけのライフサイクルの経験を通して独自の文化を構築したにもかかわらず、社会的な注目されていない世代であった。主に386世代を浮上させるための比較集団として登場し、ベビーブーム世代の実体を積極的に捉えようとする努力は、比較的不在であったといえる。しかし、最近にベビーブーム世代の引退や老後問題など、かれらに関わる各種の社会経済的 이슈が登場し、韓国社会でもベビーブーム世代が徐々に社会問題の一つの軸として浮上した（パク・キルソンほか 2005）。これにより、ベビーブーム世代の社会的関心が高まり、学問的議論も徐々に行われ始めた。

もちろん、ベビーブーム世代が韓国社会にだけ存在している世代ではない。米国や日本などの先進国の場合、韓国社会より10年ほど前にベビーブームが起こったことが明らかになった。そして韓国のベビーブーム世代とアメリカ、日本のベビーブーム世代は明らかに異なる特性を示している。韓国のベビーブーム世代とは異なり、米国のベビーブーム世代は、社会的な雰囲気为主导してきた世代である（パク・キルソン他 2005）。かれらは特有の強い個人主義的な性向を制度化して、親の世代とは差別化された価値観をみせ、親の世代の権威に反抗した。同時に、同調性を強調していた当時の社会の雰囲気にも抵抗した。また、これらは、米国の民主主義の発展の根幹となった市民的義務（civic duty）に無関心だという評価を受けたりもした。一方、日本のベビーブーム世代である団塊の世代は、親の世代とは異なり、民主主義と自由平等の理念に基づく教育を受けたが、いまだに親の世代の価値観を継承するという側面があり、伝統的な価値と新たな価値が混在しているといえる。他方、かれらは日本の伝統的な既存の秩序を拒否する学生運動の主演であり、高度の経済成長を経験した世代でもあった。

では、韓国のベビーブーム世代はどのような世代なのか？ 1955年から1961年の間に生まれた

かれらは、政治的に特別な背景を持っている。かれらは維新体制(1972-1979)と第5共和国(1981-1988)初期に青年期を過ごした人々で、政治的に敏感な時期を経験し、政治的抑圧を感じていた世代である。戦後世代とこの世代が特に異なる点は、経済的な側面である。この時期に、韓国経済は絶対的な側面と相対的な面で急激な成長をとげた。1954年の1人当たりの国民総所得が約400ドルに過ぎなかった。しかし、1961年の1人当たりの国民総所得は約1,600ドルに達していたのだ。もちろん、すべての人が経済成長の恩恵を享受したわけではないが、貧困から脱却し始めた世代である。同時に、どの世代よりも青年期に急激な経済成長を経験した世代でもある。かれらは他の世代とは異なり、社会的な経験も違う。事実、出生率が28.5%に達するこの世代の圧倒的な数によって教育制度を含めていくつかの社会的、文化的な変化を生み出した。高校平準化、卒業定員制のような高校や大学入試制度の変化だけでなく、ジーンズやフォークソングに代表される西欧文化の大衆化がその代表的な例である。この意味でベビーブーム世代は、圧縮的な成長をとげた韓国社会の政治、経済、社会の複合変化を経験した代表的な世代であったとみなすことができる。

2. 老年世代とベビーブーム世代の社会的関係

ア. 老年世代の社会的関係

老年世代の社会的関係についての研究は、比較的着実に行われてきた。高齢者研究で社会的関係は、以前から健康で活気に満ちた老後の重要な要素の一つとして考えられてきたからである(Wenger, Davies and Shahtahmasebi, 1995; Rowe and Kahn, 1997; Litwin;2001)。成功的な老後に関わる社会的関係の影響力は、韓国社会でも有効にあらわれていた。多くの先行研究で老年世代の家族関係が、生活の満足度に及ぼす肯定的な役割が確認されており(キム・ヨンボム、パク・チュンシク 2004;イ・ホソン 2005;ユン・ヒョンスク、ホ・ソヨン 2007)、親族以外の対人関係も、その数と接触頻度が高いほど、生活の満足度に肯定的な影響を及ぼすことが明らか

になった（イ・ギホン 2005）。

しかし、高齢者の社会的関係の実態を中心とした研究のほとんどは、かれらのネットワークが制限的であったという分析結果を示している。親族、友人、隣人、団体のメンバーを含む高齢者の社会的ネットワークの大きさは青・壮年層の3分の2にも満たないし、高齢者層の4分の1は一人暮らしで孤立していると示している。また、老年世代の社会的関係の構成は、青・壮年層に比べて親族が占める割合が高く、友人・隣人に代表される非親族関係が相対的に貧弱だった（チョン・ギョンヒ 1995）。高齢者の社会的関係を孤立型、同居の子供と主に交流する伝統的家族中心型、非同居の子供と頻繁に交流する修正家族中心型、非親族と頻繁に交流する地域社会中心型、子供と地域社会の両方との活発な交流を共有する多層型で類型化した結果、韓国の高齢者の多くは、家族中心型であり、地域社会中心型と多層型の割合は低く、地域社会との交流が非常に弱いものとしてあらわれた（パク・キョンスク 2000;イ・ソジョン、チョン・ギョンヒ、ソン・ビョンドン、イ・ミスク、ホン・ベギ、イ・ウンジン 2008）。

公式的な関係の場であるといえる社会参加においても韓国の高齢者は、全体的に低調な参加率を見せている。団体の活動は主に親睦活動、宗教活動と縁故を基盤とする同窓会、郷友会に偏向されている制限的な社会参加活動の様相をみせた（チョン・ギョンヒ、オ・ヨンヒ、カン・ウナ、キム・ジェホ、ソン・ウドク、オ・ミエ、パク・ポミ、2014;ホ・ジュンス 2014）。また、高齢者は老後の社会活動の重要性を認識していたが、ほとんどが集まりのような関係の活動よりは、娯楽や教育のような生産活動が重要であると認識していた。これは、韓国の高齢者の関係への欲求がほとんど積極的な共同体的関係を指向するよりは、家族関係を中心に行っているためだと解釈される（チョン・ビョンドン、イ・ギホン 2009）。

最近では、老年世代の社会的関係の変化の流れを検討する研究もあらわれた。親族や友人、隣人を含めた老年世代の非公式的なネットワークの枠は減少する傾向にあり、とくに、加齢とともに親族ネットワークが減少するという年齢効果が現れている（イ・ユンギョン、チョン・ギョン

ヒ、ヨム・ジエ、オ・ヨンヒ、ユ・ヘヨン、イ・ウンジン 2010)。公式的關係を示す集まりや団体活動の場合にも、老年世代の参加率は時間が経つにつれ、徐々に減少する傾向を示した。50%以上の高齢者は、既存の低参加率を維持するにとどまり、約25%程度は社会参加のレベルが減少する年齢効果を示し、高齢者の年齢が高いほど正式な社会的關係が脆弱になることとしてあらわれた(チェ・ギョンイン 2014)。

イ. ベビーブーム世代の社会的關係

ベビーブーム世代の研究は2010年から本格化し、最近まで継続的に増加している傾向にある。2010年以来、ベビーブーム世代が定年を迎えることになり、かれら独自のユニークな特性と、それにとまなう適切な老後準備の方法についての関心が集まり始めた。よってベビーブーム世代を扱った研究は、個人の特性、社会的關係、健康、生活水準、經濟活動、社会参加などさまざまな領域で示されている(チャン・ウンジュ 2016)。そのなかでも、社会的關係についての研究は、身体的、經濟的な老後準備だけでなく、社会的老後準備の必要性が台頭し、次第にその重要性が浮き彫りにされている(カン・ユジン 2005;イ・ジョンファ 2009;キム・ジュソン、チェ・スイル 2010)。これに関連した先行研究では、大幅に機能面での社会的關係の肯定的な役割に注目した研究と、構造面でベビーブーム世代の社会的關係の実態を検討し、類型化する研究に分けられている。

ベビーブーム世代の老後に関する社会的關係の肯定的な機能は、さまざまな先行研究で絶え間なく示されている。家族・隣人・友人に関する社会的關係の数、接触頻度、援助を受ける程度が強く、ベビーブーム世代の社会的ネットワークが良好なほど、生活の質に肯定的な影響を与えることが分かった(キム・ヒョンミン、キム・ドンヒョン 2015)。ベビーブーム世代の男性に関する研究でも、周辺の対人關係から得られる社会的支持は、主觀的生活の質と高い静的相関を示した(キム・ヒスク、ユ・グワンジャ 2013年)。また、關係の表面的な特性だけでなく、ベビーブーム世代を感じる主觀的な關係の満足度に焦点をあてた研究もある。ベビーブーム世代の

家族関係の満足度は、生活満足度にも肯定的な影響を及ぼしているということが分かった（チョン・スンドル、イ・ヒョニ 2012）。配偶者との関係の満足度は友人・隣人との交流、社会参加などの全般的な社会的老後準備においても肯定的な影響を与えることが分かった（キム・ミエ、ムン・ジョンファ、シン・ウンギョン 2012）。

社会的関係が生活に及ぼす積極的な効果は、家族、友人、隣人のような比較的近い非公式な関係だけでなく、集まりや団体活動のなかで形成される公式的關係でも示される。ベビーブーム世代の社会活動を類型化した結果、所得活動にのみ集中し、一人であるいは家庭内で主に時間を過ごすのタイプに比べ、市民活動やボランティア活動のような活動的で、積極的に団体活動を行うタイプが生活の満足度の値が最も高くあらわれた（キム・ユンジョン、カン・ヒョンジョン 2013）。これらの研究結果は、経済活動への参加や家族内の円満な関係以外にも、広い範囲で活発な社会的関係を維持する必要があることを示している。

社会的関係の構造的側面を検討した研究は、主に関係の満足度、接触頻度、支持の形を通して周辺のネットワークの実態を把握しようとした。これは主に配偶者、親、子どもという非公式関係を中心に調査している。ベビーブーム世代は、おおむね配偶者との関係で満足を感じていて、この傾向は男性の場合がより高かった（ムン・ジョンファ、キム・ミエ 2015）。かれらは老後生活で最も重要な関係としてほとんどが配偶者をあげ、ベビーブーム世代が夫婦関係を非常に重要視していることが分かる（チョン・ギョンヒ他 2010）。他方、ベビーブーム世代の3分の2以上は、親が生存しており、ほとんどが親との関係で経済的、道具的（家事支援）なサポートを提供していた。子どもとの関係においては、概ね満足度が高く、親との関係に比べ接触頻度と経済的支援のレベルが高かった（チョン・ギョンヒ、イ・ソジョン、イ・ユンギョン、キム・スボン、ソン・ウドク、オ・ヨンヒ、ユ・ヘヨン 2010）。

公式的な関係の実態に関する先行研究は、主に団体活動や社会参加活動を扱っている。ベビーブーム世代の半分ほどが、老後生活で社会参加活動の重要性を認識しており（チョン・ギョンフ

ア他 2010)、かれらの団体活動の参加率は、若いエコ世代との比較においても高かった(統計庁 2012)。また、ボランティア活動に焦点をあてた研究では、老後生活においてベビーブーム世代が、ボランティア活動への意向が高いことを示している(キム・ジョンイン 2012; キム・ジョンイン、キム・ユンジョン 2013)。とくに以前の老年世代と比較したとき、ベビーブーム世代の参加率と参加意思の割合は、それぞれ2倍、1.6倍以上高かった。これらの違いは、単純な年齢効果よりは人的、社会的、文化的資源の影響を受けているものと解釈できる(イ・ヒョンギ 2013)。

しかし、これまでのベビーブーム世代の社会的関係についての研究は、主に分析範囲が限定的であったという限界がある。ベビーブーム世代の社会的関係は、主に配偶者と子どもを中心に家族関係に限定され、公式的な関係を検討する社会参加や団体活動においては、単純にいくつかのタイプに制限的に集中し分析する場合がほとんどであった。したがって、本研究では友人、親族、隣人と多様なタイプの社会活動や団体活動への参加の実態を総合的に検討しようと思う。また、全体的な社会的関係の満足度をみるという点で、ベビーブーム世代の社会的関係の量的側面だけでなく、質的な側面までもに考慮するという点に意義を置く。

Ⅲ. 資料と測定

1. 研究資料

ここでは、ベビーブーム世代と高齢者世代の社会的関係の交流実態と、団体活動の実態と社会的関係の満足度を知るために、それぞれ『2014年、第5回高齢化研究パネル調査』と『10年目の韓国福祉パネル調査』を使用した。なぜなら、これまでのベビーブーム世代の全般的な社会的関係の実態との関係満足度を含めた資料がないためである。

ベビーブーム世代の社会的関係とこれ以前の老年世代と比較するために、各資料の1961年度以前の出生者を分析対象とした。〈表1〉は、各世代区分と主な特徴を示している。そのなかで先行

研究の世代区分に従って、1955年～1961年生まれを「ベビーブーム世代」と規定し、1954年以前生まれの老年世代のなかで1941年を起点に、以前の出生は「朝鮮戦争世代」、1942年から1954年生まれまでを「戦後世代」と分類した（イ・ミョンジン、2005）。これにより、『10年目の韓国福祉パネル調査』のなかで1961年以前に生まれた人口（n=7,342）を、ベビーブーム世代（n=1,471）と戦後世代（n=2,895）、朝鮮戦争世代（n=2,976）に分類し、『2014年、第5回高齢化研究パネル調査』資料もまた、1961年以前生まれの人口（n=7,029）をベビーブーム世代（n=1,698）と戦後世代（n=2,848）、朝鮮戦争世代（n=2,483）の三つの集団に分けて分析した。

〈表 1〉 世代区分と主要特徴

世代区分	出生年度	2016年 年齢	高校卒業 年 度	主要政治事件	一人当たり国民 総所得（ドル）	教育制度
朝鮮戦争世代	1941年以前	75歳以上	1960年以前	朝鮮戦争	-	
戦後世代	1942-1954	62-74歳	1961-1971	4.19(市民革命) 5.16 (軍事クーデター)	-	
ベビーブーム 世代	1955-1961	55-61歳	1972-1978	維新体制10.26	320-1,1431	高校標準化 (ソウル、釜山、大邱、仁川)

* 政治、社会、文化の変化は高等学校卒業年度を基準にしている（参照：イ・ミョンジン 2002）。

2. 変数の測定

ベビーブーム世代の社会的関係の交流程度は、『第5回高齢化研究パネル調査』を通して友人、親戚、隣人との接触頻度と団体活動への参加頻度を測定値として使用した。友人、親戚、隣人の接触頻度は「[回答者氏名]様と近く住んで親しく交流する、友人や親戚または親しい隣人がいま

すか？いれば、この方たちとどのくらいの頻度で会っていますか？」という質問に対して「ほぼ毎日（週に4回以上）」、「週1回」、「週に2～3回程度」「月に1回程度」、「月に2回程度（2週間に1回程度）」、「1年に1、2回程度」、「1年に3、4回程度（3～4ヶ月に1回）」、「1年に5,6回程度（2ヶ月に1度程度）」、「1年にほとんど会えない」「親しい人がいない」の項目に区分される。団体活動への参加は、「[回答者氏名]様には、下の団体のなかに参加した団体はありますか？あれば、すべて教えてください」という質問に対して、「宗教の集まり」、「親睦会（頼母子講、老人ホームなど）」、「余暇/文化/スポーツ関連団体（老人大学など）」、「同窓会/郷友会/宗親会」、「ボランティア」、「政党/市民団体/利益団体」、「その他」、「なし」などの項目で応答された。合計7つの類型別の活動への参加は、重複応答で測定されていて一つの主な活動のタイプではなく、個人の総合的な団体活動への参加レベルを知ることができる。そしてタイプ別の集まりに参加する対象者に限って「その活動には、どれほど頻繁に参加しますか？」という質問に対して「ほぼ毎日（週に4回以上）」、「週に2～3回程度」「月に1回程度」、「月に2回程度（2週間に1回程度）」、「1年に1、2回程度」、「1年に3、4回程度（3～4ヶ月に1回）」、「1年に5,6回程度（2ヶ月に1度程度）」、「1年にほとんど活動しない」、「ほとんど活動しない」の項目によって参加頻度を測定している。本研究では参加の頻度が1年に1回未満である「ほとんど活動しない」の項目は非参加として処理した。

友人、親戚、隣人の接触頻度と団体活動への参加頻度は、それぞれ親しく交流する人が存在しないか、団体活動への非参加の場合は0に設定し、その他の接触と参加の頻度は、その程度が頻繁な順に並べ替えて1から9までの数を与えた。接触や参加の頻度は、数字が大きくなるほど交流が活発であることを意味し、本研究ではその平均値を分析するのに使用した。社会的団体の活動への参加率は、世代別に人口数の対比で、集まりに参加している数を計算した。全体的な社会的関係の交流程度は友人、親戚、隣人、団体活動の接触と参加頻度を合算した平均値である。他方、社会的関係の満足度は『10年目の韓国福祉パネル調査』の社会的親交関係の満足度を使

用した。満足度は「非常に不満」、「概ね不満」、「まあまあ」、「おおむね満足」、「非常に満足」からなる5点の尺度で測定され、スコアが高いほど、社会的関係の満足度が高いことを示す。ベビーブーム世代とそれ以前の老年世代の社会的関係の満足度の違いを知るために、主観的に健康状態、性別、教育レベル、所得レベルをともに検討した。主観的健康状態は5点の尺度でスコアが高いほど、自らの健康に対する評価が高いものを再符号化した。教育水準は、回答者の最終学歴を「無学」、「小卒」、「中卒」、「高卒」、「大卒以上」に分類した。所得水準は、多様な形態の所得をすべて含む経常所得を使用した。経常所得は、勤労所得、事業と副業の所得、財産所得、私的移転所得と公的移転所得をすべて集合した値で、万ウォン単位で連続的に測定された。

これを基盤にベビーブーム世代とそれ以前の老年世代の友人、親戚、隣人の接触頻度と団体活動への参加頻度を使用して、社会的関係の実態を把握した。そして、主要な社会経済的要素が統制された状態で、二世世代間の社会的関係の満足度の平均を検討してみた。最後に、社会的関係の活動実態と社会的関係の満足度が、どのような様相に交差しているのかを検討してみた。これは、社会的関係の量的、質的レベルのすべてを以前の老年世代と比較することによって、総合的な比較を可能にし、二次元上にあらわれる様相を通して世代別の社会的関係がもつ社会的意味を分析することができる。

IV. 分析

1. 世代別一般的な特性

『第5回、高齢化研究パネル調査』の回答者7,029人の世代別特性は、〈表2〉に示されている。朝鮮戦争世代、戦後世代、ベビーブーム世代のすべての女性が占める割合が高かった。教育水準をみると、朝鮮戦争世代と戦後世代は、小学校卒業以下の割合が最も高かった。これに反してベビーブーム世代は、小学校卒業以下の割合が最も低くあられ、高校卒業の割合が最も高く、年

年齢が低くなるほど、教育水準が徐々に高くなっている。年間世帯所得は朝鮮戦争世代では、1,000万ウォン未満、戦後世代は1,000～3,000万ウォン未満、ベビーブーム世代は3000～5000万ウォン未満が占める割合が最も高かった。朝鮮戦争世代は非経済活動人口と就業者の割合に大きく差があり、非経済活動人口が占める割合が非常に大きい。戦後世代は、非経済活動人口と就業者の割合が、朝鮮戦争世代ほどの差は大きくはないが、非経済活動人口の割合が高くあらわれた。反面、ベビーブーム世代は非経済活動の人口よりも就業者がより多く、就業者の割合が三つの集団のなかで最も高いことが分かった。

〈表 2〉 世代別応答者の一般的特性

(単位: 人、%)

		朝鮮戦争世代		戦後世代		ベビーブーム世代	
		頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
性別 (N=7,029)	男性	998	40.19	1,274	44.73	715	42.11
	女性	1,485	59.81	1,574	55.27	983	57.89
教育水準 (N=7,029)	小学校卒業以下	1,796	72.33	1,164	40.87	230	13.55
	中学校卒業	247	9.95	627	22.02	312	18.37
	高校卒業	305	12.28	779	27.35	859	50.59
	大学卒業以上	135	5.44	278	9.76	297	17.49
年間世帯所得 (N=6,949)	1,000万ウォン未満	1,177	48.54	545	19.26	75	4.42
	1,000～3,000万ウォン未満	806	33.24	1,279	45.21	460	27.14
	3,000～5,000万ウォン未満	275	11.34	665	23.51	618	36.46

	5,000万ウォン以上	167	0.89	2,829	12.02	542	31.98
勤労活動 (N=7,028)	就業者	369	14.86	1,162	40.80	1,124	66.23
	失業者	4	0.16	17	0.60	25	1.47
	非経済活動人口	2,110	84.98	1,669	58.60	548	32.29

出展：『第5回 高齢者研究パネル調査』

2. 社会的関係の交流実態

世代別の友人、親戚、隣人の接触頻度を調べてみた。〈表3〉は、友人、親戚、隣人の接触頻度の平均を示している。友人、親戚、隣人間の接触の頻度は、ベビーブーム世代が最も高く、朝鮮戦争世代が最も低かった。三つの集団に対する事後分析の結果、戦後世代とベビーブーム世代には差異がないが、二つの世代すべてが朝鮮戦争の世代とは有意的な差があった。つまり、戦後世代とベビーブーム世代は、朝鮮戦争世代に比べて友人、親戚、隣人の中でより活発な交流をしている。

〈表 3〉 世代別友人、親戚、隣人との接触頻度

世代区分	平均	標準偏差	F
朝鮮戦争世代	6.09	3.01	10.48***
戦後世代	6.39	2.35	
ベビーブーム世代	6.37	2.15	

注：***p<.001

〈表4〉は各タイプ別の団体活動への参加率を示している。宗教の集まりへの参加率には大きな差がなく、余暇/文化/スポーツ活動、ボランティア、政党/市民団体/利益団体の活動、その他では、朝鮮戦争世代の参加率が最も高かった。先行研究でベビーブーム世代のボランティアへの参

加意向は、既存の世代に比べて、かなり高くなっているのに対し（キム・ジョンイン 2012;キム・ジョンイン、キム・ユンジョン 2013;イ・ヒョンギ 2013）、実際のボランティア活動に参加しているベビーブーム世代の参加率は非常に低い。他方、親睦会と縁故を基盤とする集まりである同窓会/郷友会/宗親会の活動では、ベビーブーム世代の高い参加率が際立っている。親睦会と同窓会/郷友会/宗親会の活動は、年齢が低いほど参加率が急激に増加し、したがって、ベビーブーム世代は他の二つの老年層に比べて相当高い参加率を示している。

＜表4＞世代別、性別の団体活動の参加率

活動類型	世代区分	全体の参加率(%)	性別参加率(%)	
			男	女
宗教の集まり	朝鮮戦争世代	15.79	男	11.42
			女	18.72
	戦後世代	18.22	男	12.56
			女	22.81
	ベビーブーム	17.14	男	9.09
			女	22.99
親睦会	朝鮮戦争世代	47.08	男	52.81
			女	43.23
	戦後世代	67.70	男	72.68
			女	63.66
	ベビーブーム世代	71.67	男	70.77
			女	72.33
余暇/文化/スポーツ	朝鮮戦争世代	3.67	男	5.21
			女	2.63

	戦後世代	5.83	男	5.73
			女	5.91
	ベビーブーム世代	5.42	男	5.17
			女	5.60
同窓会/ 郷友会/ 宗親会	朝鮮戦争世代	6.00	男	12.42
			女	1.68
	戦後世代	16.36	男	26.45
			女	8.20
	ベビーブーム世代	23.79	男	34.69
			女	15.87
ボランティア	朝鮮戦争世代	0.28	男	0.30
			女	0.27
	戦後世代	0.74	男	0.63
			女	0.83
	ベビーブーム世代	0.53	男	0.14
			女	0.81
政党/ 市民団体/ 利益団体	朝鮮戦争世代	0.12	男	0.30
			女	0.00
	戦後世代	0.28	男	0.47
			女	0.13
ベビーブーム世代	0.12	男	0.14	

			女	0.10
その他	朝鮮戦争世代	1.17	男	1.20
			女	1.14
	戦後世代	1.30	男	1.02
			女	1.52
	ベビーブーム世代	0.82	男	0.28
			女	1.22

〈表 5〉にあらわれた世代別団体活動への参加頻度の平均を検討すると、親睦会、余暇/スポーツ/文化活動、同窓会/郷友会/宗親会活動を除いて、すべて統計的に有意的な差はない。親睦会の場合、世代別の参加頻度の平均は年齢が低いほど高くなり、ベビーブーム世代が最も活発に参加していることが分かった。同窓会/郷友会/宗親会は、ベビーブーム世代のスコアが、他の老年層と比較したときかなり高くあらわれ、これらは非常に活発な縁故をベースにした集まりを持っていることがわかる。余暇/文化/スポーツ活動は、戦後世代が最も高く、朝鮮戦争の世代が最も低くあらわれた。

〈表 5〉 世代別・性別の団体活動の参加頻度

活動タイプ	世代区分	平均	標準偏差	F	性別平均	
宗教集まり	朝鮮戦争世代	1.09	2.57	1.75	男	0.79
					女	1.29
	戦後世代	1.22	2.66		男	0.86
					女	1.51
	ベビーブーム世代	1.14	2.57		男	0.60
					女	

					女	1.52
親睦会	朝鮮戦争世代	3.12	3.55	37.62***	男	3.29
					女	3.01
	戦後世代	3.73	2.85		男	3.93
					女	3.56
	ベビーブーム世代	3.87	2.68		男	3.76
					女	3.95
余暇/文化/スポーツ	朝鮮戦争世代	0.26	1.38	4.70**	男	0.37
					女	0.19
	戦後世代	0.39	1.63		男	0.37
					女	0.40
	ベビーブーム世代	0.35	1.51		男	0.32
					女	0.37
同窓会/ 郷友会/ 宗親会	朝鮮戦争世代	0.25	1.07	114.79***	男	0.51
					女	0.08
	戦後世代	0.70	1.70		男	1.11
					女	0.36
	ベビーブーム世代	0.97	1.89		男	1.43
					女	0.64
ボランティア	朝鮮戦争世代	0.02	0.38	1.75	男	0.02
					女	0.02

	戦後世代	0.04	0.51		男	0.03
					女	0.05
	ベビーブーム世代	0.03	0.40		男	0.00
					女	0.04
政党/ 市民団体/ 利益団体	朝鮮戦争世代	0.01	0.18	1.08	男	0.01
					女	0.00
	戦後世代	0.01	0.26		男	0.02
					女	0.01
	ベビーブーム世代	0.01	0.17		男	0.01
					女	0.01
その他	朝鮮戦争世代	0.09	0.85	1.27	男	0.09
					女	0.09
	戦後世代	0.10	0.89		男	0.08
					女	0.12
	ベビーブーム世代	0.06	0.69		男	0.02
					女	0.09

注: **p<.01, ***p<.001

3. 世代別社会的関係の満足度

〈表6〉は5点の尺度で測定された社会的関係の満足度の単純な平均を、世代別に示した表である。世代別満足度の平均は、朝鮮戦争の世代3.61、戦後世代3.71、ベビーブーム世代の3.72としてあらわれている。年齢が高い世代であるほど、関係の満足度が徐々に高まっている。しかし、これ

は世代以外の社会経済的レベルが考慮されていない単純な数値で、関係満足度に影響を及ぼす主要な変数を統制する必要がある。

<表 6> 世代別社会的関係満足度

世代区分	平均	標準偏差	最小価格	最大価格
朝鮮戦争世代	3.61	0.65	1	5
戦後世代	3.71	0.61	1	5
ベビーブーム世代	3.72	0.64	1	5
全体	3.67	0.63	1	5

<表7>はベビーブーム世代、戦後世代、朝鮮戦争世代の集団区分と、主要な社会経済的変数である性別、所得水準、教育水準と主観的健康状態をともに変数として投入し、分散分析した結果である。その結果、世代別、所得水準別、主観的健康状態別、性別、教育水準別の関係満足度の差がすべて有意的になった。相互作用の効果においても世代区分と主観的健康状態、性別、教育レベルは、すべての関係の満足度に有意的な影響を与えることが分かった。

<表 7> 世代別社会的関係の満足度の分散分析結果

		自乗合	自由度	平均自乗	F
共変量	所得水準	53.97	1	53.97	148.33***
主効果	(結合)	185.09	11	16.83	46.25***
	世代区分	12.25	2	6.13	16.84***
	主観的健康状態	156.70	4	39.18	107.67***
	性別	9.53	1	9.53	26.19***
	教育水準	7.11	4	1.78	4.88**

残差	2,513.46	6,908	0.36	
全体	2,778.27	6,962	0.40	

注: **p<.01, ***p<.001

〈表8〉はベビーブーム世代、戦後世代、朝鮮戦争世代を区別する変数と性別、所得水準、教育水準、主観的健康状態を投入した多重コレスポネンシ分析 (MCA:Multiple Correspondence Analysis) の結果である。これは、世代区分のみ考慮した社会的関係の満足度の平均とは異なり、一緒に投入された他の独立変数を統制した状態での数値を示している。この場合他の変数が統制された後、朝鮮戦争世代と戦後世代の関係満足度の平均は、それぞれ3.70、3.69に大きな差はないが、ベビーブーム世代の平均が3.58で、他の老年世代に比べて大幅に減少したことが分かる。つまり、主要な社会経済的変数を統制した後には、ベビーブーム世代の社会的関係の満足度はむしろ以前の老年世代に比べて低くあらわれている。

〈表 8〉 世代別関係の満足度の多重コレスポネンシ分析(MCA)

		N	予測平均		偏差	
			無修正	要因及び共 変数に関し て修正	無修正	要因及び共 変数二関し て修正
世代区分	朝鮮戦争世代	2,760	3.61	3.70	-0.06	0.03
	戦後世代	2,784	3.71	3.69	0.04	0.02
	ベビーブーム世代	1,419	3.72	3.58	0.05	-0.09
主観的健康状態	健康ではない	126	3.17	3.19	-0.50	-0.48
	健康な方ではない	2,222	3.48	3.49	-0.19	-0.18

	普通	2,311	3.69	3.69	0.02	0.02
	健康な方だ	2,148	3.85	3.84	0.18	0.17
	とても健康だ	156	4.03	4.03	0.36	0.36
性別	男性	2,758	3.66	3.62	-0.01	-0.05
	女性	4,205	3.67	3.70	0.00	0.03
最終学歴	無学	1,752	3.57	3.62	-0.10	-0.05
	小卒	2,178	3.66	3.68	-0.01	0.01
	中卒	1,201	3.68	3.66	0.01	-0.01
	高卒	1,362	3.75	3.71	0.08	0.04
	大卒以上	470	3.81	3.75	0.14	0.08

4. 世代別社会的関係の交流程度

世代別の社会的関係を量的に側面からの交流と接触頻度、質的な側面から関係満足度に分けて、各老年層世代が二つの側面からどのような様相を見せているのか、総合的に把握してみようと思う。社会的関係の量的側面は、親戚、友人、隣人の接触頻度と団体活動への参加頻度を総合して全体的な社会的関係の交流程度をあらわし、質的側面では主要な社会経済的変数を統制した世代別関係満足度の平均を使用した

〈表9〉に基づいて、社会的関係の交流程度との関係の満足度を、二次元的に示すと〈図1〉の通りである。全世代内の社会的関係の交流程度は朝鮮戦争世代、戦後世代、ベビーブーム世代の順で、年齢が低い世代ほど交流の程度が増えている。しかし、社会的関係の満足度のレベルをみると、朝鮮戦争世代は交流の程度が小さくても満足度が高い、反面、ベビーブーム世代の満足度は、交流程度に比べて非常に少ない。

〈表 9〉世代別社会的関係の交流程度と満足度

世代区分	社会的関係の交流程度	社会的関係の満足度
朝鮮戦争世代	1.37	3.70
戦後世代	1.57	3.69
ベビーブーム世代	1.60	3.58



(图中：〈縦軸〉사회적 관계 만족도=社会的關係満足度，〈横軸〉사회적 관계 교류 정도=社会的關係交流程度，◇한국전쟁 세대=韓国戦争世代，◇전후 세대=戦後世代，◇베이비붐 세대=ベビーブーム世代)

V. 要約と討議

本研究では、最近の韓国社会で急増している老年人口の構成に、量的にも質的に重要な構成要素であるベビーブーム世代の社会的関係を検討してみた。老年人口において社会的関係は、肉体的要素や精神的要素に劣らないほど、健康的な老年生活を送るために重要な要素である。健康な

高齢者は、マクロ的な意味において福祉や医療などの社会的費用を削減するために重要であるだけでなく、ミクロ的にも個人の幸せな生活を送るための重要な条件であるという点で、決定的な役割をになっている。

ところが、現在退職をしているベビーブーム世代は、今後の老年世代の政策と関連して注目すべきである。かれらは戦争直後の不安から脱し、出生率が急増した世代である。そのため、人数が他の世代に比べてはるかに多い。これらは政治、経済、文化など多様な分野でユニークな社会現象をつくり出してきた。ある意味では、ベビーブーム世代は、身体的、精神的、社会的な活動性を低下させず、健康な老年を送ることを意味するアクティブ・エイジング (active aging) を追求するために、適切な世代であるといえる。この世代は、知識と経験だけでなく、経済的基盤も相対的に良い方である。同時に、政治と文化的な面で積極的な世代であり、生活についても多様で積極的な欲求をもっている。

したがって、かれらが持っている既存の老年世代とは異なる特徴を把握する必要がある。このために、ベビーブーム世代の社会的関係の現状を既存の老年世代と比較して分析した。また、これらの社会的関係が、かれらにどのような意味をもち、このような結果が社会的にどのような意味をもっているのか、どうかを検討してみた。

まず、各世代の団体活動への参加率と接触頻度を調べてみると、宗教の集まりの参加率は大きな違いはないが、余暇/文化/スポーツ活動、ボランティア、政党/市民団体/利益団体の活動は、朝鮮戦争世代の参加率が最も高かった。そして、親睦会と縁故をベースにした集まりである同窓会/郷友会/宗親会活動では、ベビーブーム世代の参加率が最も高かった。これらの違いは、コホートの特徴であるといえるが、かれらの年齢による違いに起因しているかもしれない。すでに引退した人がほとんどである世代と、現在も活動をしている人の割合が、相対的に高い世代の間に差がでることはありえる。重要なことは、今後、縁故や私的関係に基づいて、社会的関係をより公的關係に基づく社会的関係へと、どのように誘導すべきかを考慮する必要がある。これは、個

人の健康だけが重要な役割を担うのではなく、市民性と公的信頼を増進する必要がある韓国社会にとって非常に重要な課題である。

第二に、ベビーブーム世代のボランティアへの参加の意向は相当高くあらわれるが、実際に参加しているベビーブーム世代の参加率は、非常に低いことが分かった。これらの結果も、現在のベビーブーム世代の現状を反映したものであるといえる。しかし、ボランティア参加のような市民性と公的信頼を高められる環境であるにもかかわらず、実際にはそれが行われていないという点は、今後の社会的課題である。さらに、他の世代に比べて経済的基盤を備えていて、社会的に多様な経験と意欲を備えたベビーブーム世代であるから、このような状況をうまく活用すれば、社会的に肯定的な結果を生みだせるであろう。

第三に、社会的関係の程度と満足度を同時に考慮すると、世代別の違いが表面化する。社会的関係の程度は、朝鮮戦争世代が最も低く、戦後世代とベビーブーム世代が相対的に高い。ところが、社会的関係の満足度をみると、朝鮮戦争世代は交流の程度が少ないが満足度は高い、他方戦後世代は、社会的関係の程度が高いが満足度は最も低い。これらの結果も、各世代の社会的交流の質的な差異によるものであるが、このような関係の程度と満足度の間隔を縮小させることは、今後の老年世代の健康に重要な影響を与える課題であると考えている。

これらの結果をみると、ベビーブーム世代は現在の社会的関係において他の老年世代に比べて相対的に数が多い。しかしかれらの社会的関係は、私的信頼に基づく場合が多く、これに対する満足度も相対的に低い。ある意味でベビーブーム世代は、現代韓国社会で市民としての教育と経験を備えた最初の世代であると思なすことができる。思春期に戦争のような歴史的な激変を経験せず、高等教育を体系的に受けた。また、経済発展によって経済的機会も他の世代に比べて多く享受することができた。豊富な社会的経験と経済的基盤をもっており、社会奉仕などの公的関係との関連が多いうえ、社会的関係に対しての欲求も強い。しかし、現在の社会的関係は、私的な関係や個人的な利益に基づいた側面が大きい。したがって、今後の課題は、どのように効率的に

公的信頼性を高め、社会的関係へ誘導するのだからである。これは、ベビーブーム世代の老年健康を増進させることであると、同時に、市民性と公的信頼の高揚という韓国社会の課題を実現することにもなるだろう。

参考文献

カン・ユジン 2005 「韓国の成人世代の老後準備に関する研究」『韓国地域社会の生活科学学会誌』

16(4) : PP159-174 (“한국 성인세대의 노후준비에 관한 연구”

『한국지역사회생활과학회지』 16(4): 159-174)

コ・キルソプ 2010 「386世代の‘その日’ : 主体形成、世代精神、そして生と政治」『文化科学』62: PP113-135 (“386세대의 ‘그날’ : 주체형성, 세대정신, 그리고 삶과 정치.”

『문화과학』 62: 113-135)

キムギョン・シンスジン・チュヘギョン 2003 「韓国人の世代別価値観の生活行動」『韓国家庭管理学会誌』21(3) : PP87-99 (“한국인의 세대별 가치관과 생활행동” 『한국가정관리학회지』 21(3): 87-99)

キム・ドウシク 2005 「環境主義の脱物質主義的価値に対する態度の研究」『環境社会学研究ECO』9: PP135-181 (“환경주의와 탈물질주의적 가치에 대한 태도 연구” 『환경사회학연구 ECO』9: 135-181)

キムミエ・ムンジョンファ・シンウンギョン 2012 「ベビーブーマの夫婦関係の特性が老後準備に及ぼす影響の研究—予備老人との比較を中心に」『韓国家族関係学会誌』17(3) : 2011-239 (“베이비부머의 부부관계특성이 노후준비에 미치는 영향 연구-예비노인과 비교를 중심으로.” 『한국가족관계학회지』 17(3): 2011-239)

キムスジョン・チェスルギ・チェセピョル 2014 「大衆文化の世代 : 大衆文化に対する認識を

- 中心に」『社会科学研究』27(1) : PP69-94 (“대중문화와 세대: 대중문화에 대한 인식을 중심으로” 『사회과학연구』, 27(1): 69-94)
- 김요ン보ム・박츄ン싱ク 2004 「韓國老人의 家族關係網と 生의 満足度」 『韓國老年學』24: PP169-185 (“한국노인의 가족관계망과 삶의 만족도.” 『한국노년학』 24: 169-185)
- 김우ソン・호운ヰジョン 2007 「消費者의 타이켄마케팅의 核心的特性と 寄与に對する 考察」 『韓國生活科學誌』16(1) : PP89-101 (“소비자 체험마케팅의 핵심적 특성들과 기여에 대한 고찰.” 『한국생활과학회지』 16(1): 89-101)
- 김윤ヰジョン・칸히ョンヰジョン 2013 「ベビーブームの 社会活動参与類型による 生の 満足度」 『韓國産學技術學會論文誌』14(3) : PP1090-1099 (“베이비부머 사회활동참여유형에 따른 삶의 만족도.” 『한국산학기술학회논문지』 14(3): 1090-1099)
- 김・ヰジョン인 2012 「ベビーブーム世代の 老後社会参与への 欲求に關する 研究」 韓端大學博士學位論文(“베이비붐 세대의 노후 사회참여 욕구에 관한 연구” 한서대학교 대학원 박사학위논문)
- 김ヰジョン인・김윤ヰジョン 2013 「ベビーブーム世代の 老後の 社会参与意向 予測要因に關する 研究」 『韓國産學技術學會論文誌』14(2) : PP655-664 (“베이비붐 세대의 노후 사회 참여 의향 예측요인에 관한 연구.” 『한국산학기술학회논문지』 14(2): 655-664)
- 김ヰジュソン・츄스イル 2010 「ライフスタイルが 老後準備度および 生活満足度に及ぼす 影響」 『韓國家族福祉學會』15(3) : 97-119 (“라이프스타일이 노후준비도 및 생활만족도에 미치는 영향.” 『한국가족복지학』 15(3): 97-119)
- 김히ョン민・김돈히ョン 2015 「ベビーブーマ世代の 社会的關係網が 生の 質に及ぼす 影響」 『特殊教育リハビリテーション科學研究』54(4) : PP89-100 (“베이비부머 세대의 사회적 관계망이 삶의 질에 미치는 영향.” 『특수교육재활과학연구』 54(4): 89-100)

- 김히스크·유그안 ज्या 2013 「베이비붐세대男性的主觀的生の質の影響要因」 『地域社会看護学会誌』24(4) : PP461-470 (“베이비붐 세대 남성의 주관적 삶의 질 영향요인.” 『지역사회간호학회지』 24(4) : 461-470)
- 문쥬옹파·김미에 2015 「베이비붐의配偶者の關係満足度の決定要因分析」 『社会科学硏究』31(2) : PP105-132 (“베이비부머의 배우자 관계 만족도 결정요인 분석.” 『사회과학연구』 31(2) : 105-132)
- 박·기온스 2000 「韓國老人の社会的關係」 『韓國社会学』34(秋) : Pp621-647 (“한국 노인의 사회적 관계.” 『한국사회학』, 34(가을) : 621-647)
- 박·코닐 2012 「세대と政党政治」 『黄海文化』74 : PP54-72 (“세대와 정당정치.” 『황해문화』, 74 : 54-72)
- 박킬손·함이니·초데오프 2005 『現代韓國人の世代經驗と文化』 集文堂 (『현대 한국인의 세대 경험과 문화』. 집문당)
- 박·철편 2001. 「세대硏究の理論的、方法論的争点」 『韓國人口学』24(2) : PP47-78 (“세대硏究의 이론적·방법론적 쟁점.” 『한국인구학』 24(2) : 47-78)
- _____ 2010 「韓國社会の世代葛藤」 『韓國人口学』33(3)PP75-99 (“한국사회의 세대 갈등.” 『한국인구학』 33(3) : 75-99)
- 박철편·칸스텍 2012 「韓國の世代変化と脱物質主義」 『韓國社会学』46(4) : PP69-95 (“한국의 세대 변화와 탈물질주의.” 『한국사회학』 46(4) : 69-95)
- 박키본·이히찬 2006 「세대別政治のイデオロギーの差異」 『韓國政策科学学会報』10(1) : PP125-150 (“세대별 정치 이데올로기 차이.” 『한국정책과학학회보』 10(1) : 125-150)
- 판·하남 2011 「베이비붐세대 :かれらは誰なのか?」 『労働レビュー』71 : PP5-9 (“베이비붐 세대 : 그들은 누구인가?” 『노동리뷰』 71 : 5-9)
- 요그아니온·박민진 2014 「베이비붐세대とエコ世代の社会特性に対応するソウル

- 市地域政策研究『韓国地方自治研究』16(2) : PP31-55 (“베이비붐 세대와 에코세대의 사회특성에 대응한 서울시 지역정책연구.” 『한국지방자치연구』 16(2) : 31-55)
- ユンヒョンスク・ホソヨン 2007 「老人の健康状態が生活満足度に及ぼす影響に対する社会的関係の媒介効果及び仲裁効果」 『韓国老年学』 27 : PP649-666 (“노인의 건강상태가 생활만족도에 미치는 영향에 대한 사회적 관계의 매개효과 및 중재효과.” 『한국노년학』 27 : 649-666)
- ウンギス・イユンスク 2005 「韓国の家族価値に関する国際比較研究」 『韓国人口学』 28(1) : PP107-132 (“한국의 가족가치에 대한 국제비교연구.” 『한국인구학』 28(1) : 107-132)
- イ・ギホン 2005 「韓国老人の文化資本と社会資本」 『韓国老年学』 25 : PP1-21 (“한국 노인의 문화자본과 사회자본.” 『한국노년학』 25 : 1-21)
- イ・ミョンジン 2005『韓国2030新世代の意識と社会アイデンティティ』サムソン経済研究所(『한국2030 신세대의 의식과 사회정체성』. 삼성경제연구소)
- イソジョン・チョンギョン이・ソン비욘돈・이미스크・ホン베기・이운진 2008 『老年期の社会経済的不平等の多次的構造分析』 韓国保健社会研究院 (『노년기 사회경제적 불평등의 다차원적 구조 분석』. 한국보건사회연구원)
- 이운기영・チョンギョン이・요뮤지・오윤이・유헤ヨン・이운진 2010 『韓国老人の生の変化分析及び展望』 (『한국 노인의 삶의 변화 분석 및 전망』. 한국보건사회연구원)
- イ・ジョンファ 2009. 「光州、全南中年層の老年期の認識と身体的、経済的、社会的老後準備」 『韓国地域社会生活科学誌』 20(2) : PP275-289 (“광주·전남 중년층의 노년기 인식과 신체적, 경제적, 사회적 노후준비” . 『한국지역사회생활과학회지』 20(2) : 275-289)
- イ・ヒョンギ 2013 「カンコクベビーブーム世代のボランティア参与及び参与意思の影響要因」 『韓国地域社会福祉学』 47 : PP227-256 (“한국 베이비붐 세대의 자원봉사참여 및 참여

- 의사의 영향요인.” 『한국지역사회복지학』 47: 227-256)
- 이·호송 2005 「都市老人の社会的紐帯と生活満足度研究」 『韓国老年学』 25 : PP123-138 (“도시노인의 사회적 유대와 생활만족도 연구.” 『한국노년학』 25: 123-138)
- 이프찬·박키ボン·쵸ンジョン 2008 「. “社会資本が集団価値に及ぼす影響」 『韓国政策科学会報』 12(4) : PP51-76 (“사회자본이 집단가치에 미치는 영향.” 『한국정책과 학회보』 12(4): 51-76)
- 찬·운쥬 2016 「‘베이비붐세대’에 대한 연구의 동향 분석」 梨花女子大大学院修士論文 (“‘베이비붐 세대’에 대한 연구 동향 분석.” 이화여자대학교 대학원 석사학위논문)
- 쵸·산진 2010 「세대경쟁과 정치적 세대」 『韓·獨社会科学論叢』 『韓·獨社会科学論叢』20(1) : PP127-150 (“세대경쟁과 정치적 세대.” 『한·독사회과학논총』 20(1) : 127-150)
- 쵸·깁판 2013 「베이비붐세대(baby-boomer generation)의 특징에 관한 연구」 『글로벌시니아健康増進開発院論文集』 3(2) : PP5-11 (“베이비부머세대(baby-boomer generation) 특징에 관한 연구.” 『글로벌시니아건강증진개발원 논문집』 3(2) : 5-11)
- 쵸·깁비 1995 「老人たちの社会的ネットワークに関する研究」 『韓国老年学』 15 : PP 52-68 (“노인들의 사회적 연계망에 관한 연구.” 『한국노년학』 15: 52-68)
- _____ 2011 「베이비붐세대의諸特性及び福祉欲求」 『保健福祉フォーラム』 174 : PP5-10 (“베이비 붐 세대의 제특성 및 복지욕구.” 『보건복지포럼』 174: 5-10)
- 쵸·깁비·오·깁비·칸·운나·김·제호·송·우독·오·미에·박·포미 2014. 『2014年度老人実態調査』 韓国保健社会研究院 (『2014년도 노인실태조사』. 한국보건사회연구원)
- 쵸·깁비·이·쵸·이·운·깁·김·스·송·우독·오·깁비·유·헤·온 2010 『베이비붐의生活実態及び福祉欲求』 韓国保健社会研究院 (『베이비 부머의 생

활실태 및 복지욕구』. 한국보건사회연구원)

チョンビョンウン・イギホン 2009 「老人が認識する社会活動に関する研究」 『韓国老年学』 29 :

PP953-970 (“노인이 인식하는 사회활동에 대한 연구.” 『한국노년학』 29: 953-970)

チョン・ソンホ 2003 「N世代の社会分化的特性と意義」 『人文科学研究』 11 : PP389-413 (“N

세대의 사회문화적 특성과 의의.” 『인문과학연구』 11: 389-413)

チョン스ンドル・イヒョ니 2012 「ベビーブーム世代の生の満足度：1998年と2008年の比較」 『老

人福祉研究』 55 : PP105-131 (“베이비붐세대의 삶의 만족도: 1998 년과 2008 년의 비교.

” 『노인복지연구』 55: 105-131)

チョン스ンドル・チョンへ산・チョンジゅヒ 2015 「ベビーブーマのライフスタイルが身体的、

精神的健康に及ぼす影響」 『老人福祉研究』 67 : PP61-82 (“베이비부머의 라이프스타일

이 신체적, 정신적 건강에 미치는 영향.” 『노인복지연구』 67: 61-82)

チョ・デヨプ 2002 「韓国の社会運動世代、386」 『思想』 54 : PP125-147 (“한국의 사회운

동세대, 386.” 『사상』 54: 125-147)

チョソンナム、ユンオクキョン 2000 「価値観と行為様式の世代間差異と類似性」 『社会科学研

究論叢』 5 : PP103-135 (“가치관과 행위양식의 세대간 차이와 유사성.” 『사회과학연

구논총』 5: 103-135)

チョ・へソン 1990 「韓国社会の世代区分と差代差異研究」 延世大学大学院修士学位論文 (“한

국사회의 세대구분과 세대차이 연구.” 연세대학교 대학원 석사학위논문)

チャ・ソンラン 2012 「ベビーブーム世代のための未来社会的資本—ベビーブーム世代の集团的

特性を中心に—」 『韓国家族資源経営学会誌』 16(1) : PP67-83 (“베이비붐 세대를 위한 미

래 사회적 자본 -베이비붐 세대의 집단적 특성을 중심으로-.” 『한국가족자원경영학회

지』 16(1): 67-83)

チェ・ギョン인 2014 「尚志大学の老年期社会参与の变化軌跡：心理社会的機能との関係及び

- 予測要因」尚志大学大学院博士学位論文（“상지대학교 노년기 사회참여의 변화궤적: 심리사회적 기능과의 관계 및 예측요인.” 상지대학교 대학원 박사학위논문)
- チェセッピオル・イミョン진 2011 「韓国人の映画の趣向構造：映画趣向を通してあらわれた韓国社会の象徴的排除」 『余暇学研究』 9(1) : PP1-26 (“한국인의 영화 취향 구조: 영화취향을 통해 드러나는 한국사회의 상징적 배제.” 『여가학 연구』 9(1): 1-26)
- 統計庁 2012 「報道資料(2012. 8. 2)」
- _____ 2015 『世界と韓国の人口の現況及び展望』 (「세계와 한국의 인구현황 및 전망」)
- ホ・ジュンス 2014 「老人たちの社会参与活動の類型別決定要因に関する研究」 『老人福祉研究』 64 : PP235-263 (“노인들의 사회참여활동 유형별 결정요인에 관한 연구.” 『노인복지 연구』 64: 235-263)
- ファン・サンミン 2000 「新世代 (N世代) の自己表現とサイバー空間での相互作用」 『韓国心理学会誌 : 発達』 (“신세대(N 세대)의 자기 표현과 사이버 공간에서의 상호작용.” 『한국심리학회지: 발달』 13(3) : 9-19)
- ファンサンミン・キムドファン 2004 「韓国人のライフスタイルと世代心理的アイデンティティ」 『韓国心理学会誌 : 社会及び性格』 18(2) : PP31-47 (“한국인의 라이프스타일과 세대의 심리적 정체성.” 『한국심리학회지: 사회 및 성격』 18(2) : 31-47)
- ファンサンミン・ヤンジニョン・칸ヨン쥬 2003 「世代集團の価値で区分されたライフスタイルの類型とそれともなう權威主義の傾向の比較」 『韓国心理学会誌 : 社会及び性格』 17(2) : PP17-33 (“세대집단의 가치로 구분된 라이프스타일 유형과 그에 따른 권위주의 성향의 비교.” 『한국심리학회지: 사회 및 성격』 17(2) : 17-33)
- Laufer, Robert, and Vern Bengtson. 1974. “Generations, Aging, and Social Stratification: on the Development of Generational Units.” *Journal of Social Issues* 30(3): 181-205.
- Litwin, Howard. 2001. “Social network type and morale in old age.” *The Gerontologist*

t 41(4): 516-524.

Rowe, John, and Robert Kahn. 1997. "Successful aging." *The gerontologist* 37(4): 433-440.

Wenger, Clare, Richard Davies, and Said Shahtahmasebi. 1995. "Morale in old age: Refining the model." *International Journal of Geriatric Psychiatry* 10(11): 933-943.

WHO. 2016. "WHO definition of Health." <http://www.who.int/about/definition/en/print.html>.